

2008年ヨーロッパ人口会議

2008年7月9日から12日までの4日間、スペイン、バルセロナにおいて、2008年ヨーロッパ人口会議（European Population Conference 2008）が開催された。本会議は、ヨーロッパ人口学会（European Association for Population Studies; EAPS）が、2～3年の間隔で開いている学術集会であり、本年は同学会の1983年の設立から25周年に当たる大会となった。大会はバルセロナ自治大学（Universitat Autònoma de Barcelona）に附属する人口研究センター（Centre d'Estudis Demografics）との共同主催であり、多くのセッションと参加者を擁するものとなった。会議では、人口に関連するあらゆる分野のテーマについて報告・討論が行われたが、今回の会議では名称に“Migration and Migrants in Europe”という副題がついた。これはすなわち、現在ヨーロッパ諸国において、国際人口移動が人口変動の最も重要な要素となりつつあるという認識に基づいて、本会議の中心テーマとして定められたものである。このことを象徴するものとして、会議のロゴではEUの人口ピラミッドを描き、その中に国際人口移動を経験した者の割合を円グラフで示した図柄が用いられた。その割合は2005年前後で統計のある21カ国について8.7%ということである。

会議ではちょうど100を数えるセッションにおいて400に近い研究報告がなされ、数多くの興味深いセッションが同時に進行するため、どんなに駆け回っても貴重な報告の聴講をあきらめなければならなかった。現在、少子化ならびにその帰結としての急速な人口高齢化についてわが国と課題を共有するのは、ヨーロッパの国々である。各国において問題意識が高まっているとともに、多様な経済、歴史、文化、環境のもとで同じ課題に取り組むこれらの国々は、わが国の今後の対処にとっても参考となるものである。これまで人口研究では方法論の面で米国がリードしてきたが、わが国では今後ヨーロッパから学ぶことが多くなるはずである。

本会議には、当研究所からは3名が出席し、佐藤龍三郎国際関係部長は白石紀子室長、板東里江子主任研究官との共同研究によるわが国の人工妊娠中絶について、岩澤美帆室長は三田房美主任研究官との共同研究による挙児希望女性人口について、筆者（人口動向研究部長）は出生過程のコーホート変化についてそれぞれ発表を行った。最後に挨拶に立ったヨーロッパ人口学会会長の Francois Heran フランス国立人口研究所（INED）所長からは、本会議がこれまでで最多の参加者数となったことが伝えられた次第である。

（金子隆一）